



和裁の技術とともに 日常生活の礼儀作法も教授

かつては女性としてのたしなみであった和裁

女性が着物を着用する機会がかなり減っています。昔は料理や着物をつくるのは、女性のたしなみとされていました。子どもの浴衣は母親が縫って着せるのが当たり前でした。そればかりか、和裁の技術を身に付けている人のところには、近所の人や呉服屋さん、百貨店などから仕事の依頼がよくありました。当然、街には着物の縫い方を教える「針のお師匠さん」もたくさんいました。さらに各種学校の認可を受けた和裁学校や和裁科のある専修学校もありました。中部日本和裁教授連合会はそうした和裁の先生たちの集まりとして昭和29年に設立されました。かつては男性会員もたくさんいましたが、現在は女性が大半を占めています。男性会員が多かったのは和裁学校などの経営者に男性が多かったといったということもあります。

名古屋若宮八幡社の末社である神御衣社は毎年2月8日に針供養が行われることでも知られていま



す。神御衣社はもともと愛知県立田村（現愛西市）にあったものを明治36年に遷したもので、昭和20年に空襲で焼失しましたが、中部日本和裁教授連合会が昭和32年に再建しています。

いい仕事には、いい手の跡が残る

優れた和裁の技術を身に付けて、それぞれの和裁学校や針のお師匠さんからの認定を受けても、やはり統一した基準があった方が便利です。そこで中部日本和裁教授連合会は統一した基準を設けました。子どもの浴衣からはじまり、長襦袢や着物のコートなど、比較的やさしいものから徐々に難しくなっていきます。中部日本和裁教授連合会が教えたのは、和裁技術だけではなく、日常生活の礼儀作法も教えました。

和裁の技術は手先の器用さだけではなく、着る人の身になって、心を込めて一針一針を丁寧に、縫いこんでいくことが大切です。

仕事には必ず「手の跡」が残ると言われています。

いい仕事をしたならば、いつまでも作品にいい手の跡が残っています。仕事を頼んだ人は手の跡の善し悪しを覚えています。

料理にお袋の味があるように、せめて自分の子どもの浴衣をつくることのできる程度の和裁技術は母から娘へと受け継いで欲しいものです。

DATA ■ 中部日本和裁教授連合会

所在地：海部郡蟹江町城4-230

- ・昭和29年：中部日本和裁教授連合会設立
- ・昭和32年：若宮八幡社の末社に神御衣社再建